



馬耳東風

先に金融庁の審議会がまとめた「高齢社会における資産形成・管理」と題した報告書の取扱いが議論を呼んでいる。以前、福田康夫元首相が公文書の隠ぺい・改ざん・廃棄問題に関して、「記録は民主主義の原点」と述べていた。「正確な公文書が保管されていることが国際的に信用される国の絶対条件になる。国会でのすべての発言が公文書として記録され、残されれば議員は慎重に発言するようになるでしょう」とも。最近、失言、虚偽発言などが頻発し議員への信頼が失われている感があるが、どうしてこのような風潮が支配的になってきたのだろうか。今年、1月、米国の大手新聞が政治家の誤解、虚偽発言を調査したが、この背景にはこのような政治家の発言により、国際的に自国への信頼が失墜しつつあることへの危機感があると思われる。同様な言動が日本でも常態化しつつあると感じるのは筆者だけであろうか。

いつの時代も、人間社会は相互の信頼関係に基づいて成り立っており、信頼関係が失われた社会ではいくら法令・規則を整備しても安心して生活できる社会にはならない。上記の政治家の発言に見られるように、多くの国が「自国第一主義」を基準に行動しだした感があるが、行き着くところは武力衝突しか無いように思える。戦後半世紀の間、われわれはより豊かな社会を目指して学び、働き、それを成就してきた。しかし、失われた20

年といわれる21世紀に入ってから、その基調が揺らいできた。社会の普遍的な価値としての「平和と自由」、これを支える相互信頼という大きな柱が崩れてきたように感じられる。国の中枢機関の考え方、言動は社会に大きな影響を及ぼす。小耳に挟む国会での議論は、物事を短絡的、狭視野的にとらえ、唯我独尊、相手を「敵か、味方か」でとらえ対応しており、思考停止状態にあるように思われる。巷で起こる様々な事件でも意見が合わない相手を殺したり、自らの親・子どもを殺してしまう。自分の人生よりも些細な事が重要という当事者の価値観が理解できない。

憂き世の不条理が目に残り出すと、以前「歴代宰相の師」と言われた安岡正篤のことを思い出す。「運命を開く」、「運命を創る」、「論語の活学」、「人物を創る」などの人間学に関する多くの著書を出している安岡は「政治家は理念がどうであろうと、その実際は名誉・利権と密接に結びついており、国家のためとか、国民のためとか、どれほど無欲で謙虚な事を言っても、政権を取ると、それを守るために私利・私欲に囚われ墮落してゆく」と言っている。時代は変われども政治の世界に身を置く者の深層心理を表した言葉として色褪せない。残念ながら政治家の資質に疑問を抱くことが多い。昨今、この原稿の締め切り直後に参議院選挙の結果が判るが、国の将来を託すに値する議員が出てきてほしいものだ。

(青)